

Title	The racial history of man, New York. By Roland B. Dixon
Sub Title	
Author	移川, 子之藏(Utsurikawa, Nenzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.2 (1924. 8) ,p.178(339)- 179(340)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240800-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南北戦争を以て全米國史の一轉期とするならば同戦争以後に於ける米國は再生せる米國と云はなければならぬ。産業の隆盛大企業の勃興大ツラストの發生等は政界に大なる波紋を産み、兩大政黨を中心として利害の岐るゝ處に従つて様々なる紛糾と混亂とを惹起し進歩と腐敗とを織り混ぜたる現代社會を形成する過程をなしてゐる。更に西部未開地の開發と大陸横斷鐵道の完成とは米國の産業界に一大刺戟を與えこれより米國は從來の孤立的境地を脱し漸次對外的に發展する傾向を採り些々たる口實のもとに西班牙との戦争を行ひフヒリツピン群島を獲て東洋に飛躍すべき根據地となしパナマ運河の開鑿によつて東西兩大洋の連絡を便ならしめ併て國防上の一大威力を加えた。斯して國家の基礎を堅固にしたる後世界大戰の勃發するに及んで正義人道の大旗を翳して参戦し「アメリカ第一」の標語の下に國威を世界に發揚することを得た。著者は以上の歴史的過程を二十四章に亘つて極めて平易に而して又極めて親切に説明してゐる。

本書は米國史の概念を得んと欲する初學者に最も丁寧なる手引きとして推賞するに足る價值を有するものと思ふ。(山口昌)

The Racial History of Man, New York.

By Roland B. Dixon

1923. XVI, 583 pp.

本著は人種體型特に頭形(頭蓋長幅、並に幅高率)鼻形(鼻長幅率)に基き人種の矩進體型を定め、人類間にありて、各々類縁

を示すものと、示さざるものと區別分類し、地理的分布等を考察し、以て全人類の歴史を論究せるものにして、其研究方法たるや在來の方法とは全然其趣を異にし、在來の歴史、古來の學說を排し、只測定により表示されたる結果に憑りて其論結を索めたものである。序文の冒頭に明記せられたる通り本書は主として新しき試みである。

體型の矩進として何故に以上の三點を撰び他を捨てたるかの理由に就ては詳數説明がある、爾來人體の測定に關するものは徒らに徴に入り細に入り、比較研究をするにしても實際使用せざるものが澤山にある、今著者の撰びたる矩進は殆んど如何なる人類學でも必ず測定するものであり、然して比較研究上最も信頼し得べきものと認められて居るものである、實施に比較研究を試みたる者にして初めて著者が僅かに以上の三點を矩進とせる事に深く共鳴し得るのである、然し著者が特に三點を撰びたる事に關しては書中詳數其理由を述べてゐる、實際、人類の分類は區々にして其間に一貫せる適確なる矩進が無く、折角無數の測定や研究が有ても煩雜の度を増すのみであつて Synthesis を缺いて居つた感じを禁じ得なかつた。著者の私信にある如く「世間には色々の批評をする人があらう」けれ共此書によりて始めて全人類分類上に一種の矩進を得たと云ひ得る。此意味に於て此書は獨特のものであり、頗る有意義だと考へる。書中讀者をして首肯せしむる所が多い。全文五百八十三頁の可成の大冊であり、全世界に亘つて材料の蒐集に勞力を惜まざりし事は一見して感知される、書中吾人の肯

弊に當らざる所が無いでも無い、乍併、苟も人類の歴史に興味を有するものは一讀の必要があると思ふ。(移川子之藏)

The Mind in the Making.

By J. H. Robinson, 1921

本書の發行趣旨に就ては史學第二卷第一號に間崎氏の紹介がある。今其の概要を茲に紹介する。

本書は收むる處第八章十七節二三〇頁内外のもので新奇なる研究により先づ近代心理學上より思考形式種類から説き人間の動物的遺傳と未開精神状態から希臘創始時代のイオニア、エレア、ピタゴラス、三學派の自然哲學からアテーネ文化のソフィスト運動に初まるソクラテースの精神的學問の獨立を述べそれより。プラトン、アリストテレスの組織時代の影響を記し次に中世紀を歐洲思想史の見地より教父時代、暗黒時代、後期中世の三期に分類し所謂中世起源を後のスコラ哲學即ち基督教哲學時代の千年王國に發するを論じ吾々現今の文化や人類思想は凡て直接に此の時代に屬すべきものであるを述べ極めて少數の大膽なる自由思想家のみ此の假定から徐々に脱し得るだけで舊教徒であらうが、新教徒であらうが基督教信者の多數は依然此の時代に屬すべきものであるを論じそれより十七世紀の自然科學的の革命に入り近代自然科學の基礎學者天才的ガリレオ、ボイル、デカルトの三人を並置して其の天才的創造的思考活動の及ぼせる精神的革命を述べ自然科學的研究精神を

鼓舞して人類進歩の歴史的發展経路を示し最後に現時の社會改造問題にまで言及して思想の改善と善導を示したのが此の書の概要である。

本書は要するに思想改造論であるが其の起點を歴史の科學的研究法に求め公平なる歴史的事實の承認と實際的目的を以つて傳統的權威や一切の社會人心の迷妄や臆斷を排しやうとするので彼の十七世紀の自然科學的實際的學問運動の主張をも認められ其の復興精神に充ちたる點や殊に彼の有名なる經驗的哲學者フランシス・ベーコンの主張偶像説を思はしむる點に特色を自負を認め

る。卷頭第一章本書の目的を題して著者は歴史研究者としての抱負を確信を語つてゐる。

「歴史研究者として多年特に人間が今日一般に行はれてゐる様な人生に關する觀念や信念を如何にして有するに至つたかといふ研究に従事して來たる著者は少なくとも歴史は吾々現在の苦境や混亂を照明するものだといふ結論に達した。(同書五頁)

同じく同章を参照する。

「吾々は實際的人間の行爲及び組織を理解する目的を以つて吾々の精神の完全なる改造に着手すべきである。吾々は事實を新に批評的に冷靜に試験しなければならぬ。然らば吾々の觀察を古い哲學や經濟學及び道德に依つて歪められずに吾々の哲學は此の試験の結果として自ら獨立に組織せらるゝであ